

C. 総合学習の研究

三橋 一夫 徳井 輝雄 高須 明 田中 裕巳 白井 宏 増田 温美
松井 一幸 山田 雄一 安藤富美子 服部 祐子 高橋 香澄

総合学習の場としての研究旅行の試み

はじめに

総合学習グループは、昨年度本校紀要においては、総合学習の現代的意義を述べ、その上で今日、もっとも各教科の協力体制が必要とされ、それだけ複雑な中身と発展性をそなえている公害問題について、中学・高校の全学年にわたって、主要な教科書がどのように取り扱っているかを調べ、その成果を発表した。この作業は、現行教科書において、社会科、保健、国語、理科、英語、技術・家庭の各教科にわたって公害関係の教材（いわゆる4大公害裁判関係はもちろん、有害食品、自然破壊、環境権などにかかわるものも含む）が相当数あること、そして他教科においてどの程度のことを学習しているのか知っておくことが、反公害の学習を展開する上でいかに重要であるかを明らかにした。しかし、その後は、この前提のうえに、各教科にまたがる反公害学習の具体的な展開を、という方向をまだ実践化しえていないというのが現状である。

今年度の当研究グループの実践のうちで、ほぼ全員で取り組むことの出来たものは、11月の高2の研究旅行に、可能な限り“総合学習”の観点から取り組んでみようということであった。グループのメンバーのうち、徳井・白井・山田の3人は担任であり、松井は副担任であること、担当教科も徳井は数学、白井は国語、山田は英語、松井は物理、田中は倫社と直接に5教科にまたがっていること、三橋・高須は高1においてそれぞれ生物と地学を担当していること、養護の服部は養護教諭の立場から研究旅行に引卒教官として参加すること、以上の条件が“総合学習の場としての高2研究旅行の試み”に取り組ませることとなった。

次章で徳井が述べるように、研究旅行全体のテーマがはっきりしていないこと、萩→広島→大久野島というコースを、明治維新から15年戦争までのスパンで、日本の軍国主義化とその帰着という観点から指導しきれなかったという点が最大の問題点として残るであろう。教育課程との関係で、たしかに日本史は高3で学習するわけだが、せめて当研究グループのメンバーがそのような観点から授業実践と研究旅行にあたっての

指導を行っていたら、生徒の研究旅行への取り組み方も違っていたことは事実であろう。

しかしながら、研究旅行の資料集の作成と、広島における原爆学習については、当グループのチームワークの良さがある程度発揮されたように思う。資料集の作成については、後に白井論文が触れているので省略するが、ここでは広島における原爆学習の事前指導について簡単に紹介しておこう。

- 国語 白井の担当は古典であったが、峠三吉、原民喜、石垣りんの作品をプリントし、鑑賞させた。
- 倫社 担当の田中自身が長崎で被爆しており、思想形成にあたっての体験、経験のもつ重要性という教科の観点から、倫社においては過去数年にわたる原爆学習の積み重ねの上に行なわれた（Ⅲを参照）。
- 数学 担当の徳井は工学部出身であり、中学校においては技術も担当し、反公害の学習を重視してきた。とくに原子力発電の安全性について、スリーマイル島の事件や原子炉内での被爆を例として、HRや必修クラブ（公害研究クラブ）などで、高2の生徒へも指導した。
- 物理 担当の松井は、授業の中で原子爆弾の構造、平和運動の重要性について論及した。
- 英語 リーダーを担当している山田は、計4回の授業において原爆詩の翻訳・和訳を通して、原爆に対する“心”、“訴え”を重視した実践を展開した（Ⅳを参照）。

原爆学習に直接連絡を取りながら関与したものは以上の通りであり、このような内容の域を出れなかった訳であるが、現地広島での学習は概ね次のように実施された。

- | | | |
|-----------|--------|---------------------------------|
| 11月14日(水) | 11時46分 | 広島駅着 |
| | 12時20分 | バスにて平和公園着 |
| | 同 40分 | 映画「ヒロシマ 原爆の記録」を鑑賞（平和記念館2階ホールにて） |
| | 1時5分 | 平和記念資料館館長高橋昭博氏の講演および質疑 |

2時20分 平和記念資料館見学

2時40分 平和公園を離れる

映画、講演、見学をあわせて2時間余りの窮屈なスケジュールとなり、高橋館長との話し合いも不十分で、生徒にはもっと身近に聞いておきたいことが沢山残ったし、資料館の見学もまさに駆け足となってしまった。広島での学習についての生徒の印象、そして原爆体験をめぐっての総合学習の評価の問題は、Ⅲの田中論文

を参照して欲しい。

以下、今回の当研究グループの発表は、「総合学習の場としての高2研究旅行の試み」として、Ⅰ. 総合学習からみた研究旅行(徳井)、Ⅱ. 学習としての旅(白井)、Ⅲ. ヒロシマ体験と倫社での取り組み(田中)、Ⅳ. 英語を通しての試み(山田)、Ⅴ. 研究旅行における生徒の健康管理に対する認識(服部)、の5つのレポートから構成されている。〔田中裕巳〕

Ⅰ 総合学習からみた研究旅行

徳 井 輝 雄

1. 本校の研究旅行

本校では、次第に観光旅行化の途をたどりつつあった修学旅行を改革するため、種々検討の結果、昭和47年から現行の様な形態の「研究」旅行を行ってきた。

この改革のきっかけとなった時代的背景には、当時(昭和44年～46年)、学園紛争が高校においても起っていた事があげられる。さらに、社会的には、受験体制下にある高校教育に対する批判が非常に高まり「何の為の教育か」という問いかけがなされた事等があげられる。したがって当然の事ながら、観光旅行化した修学旅行に対しても「何の為の修学旅行か」という問題意識が、社会世論や教師、生徒の中にもあったのである。たとえば、教室の中だけの学習ではなく、校外学習の場や生徒の自主活動の場を与えよとか、人間同志(友人同志、生徒と教師)のふれあいの場が欲しいとか、いわゆる管理主義的な知育偏重教育に対する批判が吹き上げていたが、これが修学旅行をこれらの批判に応える場の一つとして再認識し再構築していこうという気運が盛り上がるきっかけとなったのである。

本校の高校の修学旅行は昭和47年以来現在に至るまで、次のような形態の下に行われている。

まず実施の10～6ヶ月前から生徒による研究旅行委員会を発足させる。この委員会は、旅行の目的地を決定する段階から、グループ研究の事前準備、現地での研究調査、事後の研究報告集の発行などの生徒の自主活動の中心となり、教師集団の指導はこの委員会を通じて行われる。目的地では5～10人位のグループに分れ調査研究活動が展開されるが、グループ研究の内容面への教師側の指導が、各教科の協力体制の下に行われるという事が少なく、引率教師(高2の担任団)にまかされ、今一つ深められない状態である。

2. 総合学習の場としてみた研究旅行

昭和54年度の研究旅行は11月12～15日に、萩、広島、大久野島(瀬戸内海)と展開された。本研究グループのメンバーが担任3名を占めていた事もあって、この旅行を、校外学習、グループ学習、自主的学習の場として活用を強化するため、総合学習の場としてとらえなおしてみる事にした。当初その総合性の発揮の方向は、1、ヒロシマの原爆資料館見学を通じて、核兵器・戦争について考えさせる。2、萩における研究活動を成功させる。3、これに見合った生活指導をする事でこの旅行を全体として研究旅行として成功させる。というものであった。

〈事前準備〉 上述の1がうまくいくように、主に倫社、英語の時間が使われた(Ⅲ、Ⅳを参照)。また生徒の自主研究の呼び水とするために、引率教師を中心に引率教師以外からの協力も得て、研究旅行の為の資料や旅行全体をうまく成功させる為の意見をまとめ、生徒の作製したしおりの中に掲載した。グループ研究の指導は、事前準備の仕方を各グループのリーダーに助言する程度に終わった。しかし、中には、自分達の研究テーマに沿って現地(萩)の関係者(市役所、商店、萩焼壺元等)に手紙を出したり、萩を知る為に名古屋市を再認識したり、萩焼を知る為に瀬戸焼を調べたり、松下村塾を知る為に現在の教育について考えるなどいくぶんかの活動はみられた。また図書委員は、図書館に研究旅行コーナーを設置し、萩、ヒロシマ、秋芳洞等に関係する文献をまとめておきクラスメートの事前研究の便宜をはかった。

旅行委員は旅行社との接渉や、教師集団と生徒集団との接渉を通して、旅行全体をうまく運ぶ為の旅行中の生活全般の計画も立てた。服装なども研究活動にふさわしいものとするとりきめを生徒全体に示した。大